

中国中等教育における日本語教科書の分析 —練習を通して見た教科書の変化—

冷 麗敏

要 旨

中等教育におけるこれまでの日本語の教科書で、「～は～です」を学習項目として取り上げた課の練習項目について、考察分析を行った。従来の教科書は単語の読み書きや丸暗記が主な学習目標として設定され、初級の音声や仮名の学習段階においては日本語の発音の正しさやなめらかさを重要視することが分かった。言わば、言語知識のみ重視することが従来の教科書の特徴として捉えられる。これに対し、新教科書は初級段階においては、日本語の発音を重視する方針は従来とは一貫しているが、同時に、「聞く・話す・読む・書く」の四技能統合的な練習項目が組み込まれている。また、四技能の中でも、とりわけ、初級段階において、「聞く・話す」技能を優先的に発達させようとする姿勢が伺え、同時にコミュニケーション志向が強く現れている。

【キーワード】中国、中等教育、教科書、学習項目、学習目標設定

0. はじめに

中国では基礎教育改革が急ピッチで進められている。そもそもこの基礎教育改革とは基礎教育のカリキュラム体系、構造、内容の見直しを中心とする改革である。2001年5月に、「基礎教育改革と発展の決定」という基礎教育改革のための方針や政策が決められ、2001年6月に、教育部「基礎教育改革綱要（試行）」が発表された。このような情勢の中、中等教育の各科目の新しい学習指導要領が策定された。

日本語教育では新しく策定された学習指導要領注1に合わせ、新教科書が作成され、その使用も開始されている。では、今、中等教育の日本語教育にどのような変化が起きているのだろうか、本研究では教科書の練習項目に焦点を当て、考察を行う。これを通し、中国の日本語教育の変化の一端を明らかにしたい。

1. 日本語教科書と学習指導要領

周知のように、教科書と学習指導要領は密接な関係にある。学習指導要領があって、教科書が作成されるわけである。中等教育の日本語教育では1982年の学習指導要領『中学日語綱要』を初めとし、その後、1992年、1995年の学習指導要領『教学大綱』がある。そして、2001年に、新学習指導要領『全日制義務教育日語課程標準（実験稿）』

が策定された。これまで、日本語の学習指導要領が策定されるたびに、これに準拠した教科書が作られてきた。過去20数年間の間、中等教育の日本語教科書は日本語の学習指導要領と共に歩んできたと言える。

2. 分析の対象

本研究で取り上げた教科書は次の3種である。1982年、中等教育初の全国統一の日本語教科書と1992年の教科書と2001年の新教科書の各1冊である。

- (i)1982年—1986年 『初級中学課本 日語（試用本）』 第一冊（教科書(i)と称する。）
- (ii)1992年—1995年 『九年制義務教育三年制初級中学教科書 日語』 第一冊（教科書(ii)と称する。）
- (iii)2001年—2004年 『義務教育課程標準実験教科書日語』 七年級下（教科書(iii)と称する。）

上記の教科書において、「～は～です」を学習項目として取り上げた課の練習項目を分析の対象とする。取り上げたのは教科書(i)の第8課「それは木です」—練習(P.86-91)、教科書(ii)の第4課「つくえといす」—練習(P.29-30)、教科書(iii)の第2課「あれは何ですか」—練習(P.17-21)である。以下、学習項目、学習目標の観点から、これらの練習項目を考察し、比較分析を行う。

3. 考察

3.1 教科書(i)

教科書(i), 第8課(「それは木です」)では日本語の音声はすべて学習済みで, 五十音図, 濁音, 撥音, 拗音, 促音など平仮名の復習が行われ, 「～は～です」の練習が学習項目となっている。練習は九項目ある。

練習(一)と練習(二)は平仮名を繰り返して読む練習と中国語で単語が提示され, 日本語の発音の清音と濁音とでは単語の意味が異なることに気づかせる。例えば, 「くし」と「くじ」はそれぞれ中国語で「梳子」と「九点」で示している。練習(三)と練習(四)は五十音図を暗記して書けるようになるための練習である。練習(五)は「～は～です」の文を繰り返す練習である。例えば, 「A: きはしよくぶつです。やさいもしよくぶつです。—B: きもやさいもしよくぶつです」。キューとして, 「A: これもほんです。あれもほんです」のように「A」部分だけ提示され, 「B」として, 「これもあれも本です」を産出することが求められる。練習(六)は中国語の単語を日本語に翻訳する練習, 練習(七)は助詞の穴埋め練習, 練習(八)は本文を繰り返して読む練習, 練習(九)は五十音図を暗記して書かせる練習である。

3.2 教科書(ii)

教科書(ii), 第4課(「つくえといす」)ではまだ音声の学習が終了しておらず, 「ま行」, 「ば行」, 「ぱ行」が主な学習項目である。練習は八項目ある。練習(一), 練習(二)と練習(三)は平仮名の識別, 朗読, 暗唱の練習である。例えば, 練習(三)は「ま行」, 「ば行」, 「ぱ行」の暗唱の練習である。「1. まめみめむまも まめみむめもまも 2. ばぶびぼぶばぼ ばぶびぶべばぼぼ…」など。本来, これを繰り返して読ませるだけで, 発音の正しさやなめらかさが増すという発音練習の目標が十分達成されるはずである。しかし, ここで暗記暗唱をさせている。これは意味がないことであろう。練習(四)は文型「～は～です」の文を変換する練習である。「は」を「も」に置き換える練習と, 「～は～です」の疑問文を否定文に変換する練習である。例えば, 「1. A: これはえんぴつです。B: これもえんぴつです。例2. A: これはあしですか。B: いいえ, それはあしではありません」などのように練習させている。

教科書(i)と同じ, ここでせっかく文を取り上げたにもかかわらず, 会話らしい練習は見当たらない。練習(五)と練習(六)は提示された平仮名で単語を書く練習と, これまで習った「身体」, 「食べ物」に関する単語を書く練習である。どちらにしても, 単語の意味と書き方の暗記がしっかりできるようになるための学習目標の設定である。練習(八)は本文の暗記暗唱である。

教科書(i)教科書(ii)双方の練習項目について言えば, まず, 語彙や文を正しく読んだり, 書いたりすることができること, 語彙の暗記暗唱ができることが学習目標として設定されている。それから, 初級の音声や仮名の学習段階において, 日本語の発音の正しさやなめらかさが最も重視されていることが分かった。

3.3 教科書(iii)

教科書(iii)で「～は～です」という学習項目が取り上げられたのは第2冊(七年級下)の第2課「あれはなんですか」である。この課の練習は「会話練習」, 「聴解練習」, 「応用練習」, 「自己測定」の4部構成となっている。

3.3.1 会話練習

「会話練習」ではテープを聞き, コミュニケーション用語を練習する。相手をほめる表現「すごいですね」はこの課のコミュニケーション用語である。挿絵があり, コミュニケーション用語を使用する場面が提示されている。例えば, 速く走っている人のことを見て, 「すごいですね」と言う。「～は～です」の文を取り扱った練習には, 例えば, 次のような一例がある。

先生: 李佳さん, これは李佳さんのノートです。

李佳: はい, ありがとうございます。

健太: 先生, わたしのノートは()ですか。

先生: 健太君のノートは……これです。

健太: はい, ありがとうございます。

①写真 ②さくぶん ③テープ ④しゅくだい

同じく「～は～です」を取り上げた練習項目ではあるが, 従来のとは明らかに異なる。従来ならば,

A: きはしよくぶつです。やさいもしよくぶつです。

B: きもやさいもしよくぶつです。 —教科書(i)

A: これはえんぴつです。B: これもえんぴつです。

A: これはあしですか。B: いいえ, それはあしではありません。 —教科書(ii)

など、ただ単に文の繰り返し練習の設定であった。しかし、教科書(iii)は上の例のように、文脈のある会話の練習となっている。

3.3.2 聴解

「聴解練習」は3項目ある。

練習1と練習2では、「かき、みかん、テープ、ノート」などの挿絵が提示されている。いずれもこの課で習った語彙である。例えば、「みかんです」を聞いて、みかん(の挿絵)に「✓」をつける。練習3は、「犬ですか。—いいえ、犬ではありません。猫です。」と聞いて、猫の絵を描かせるという練習である。

単語の定着のための練習項目の設定は教科書(i)と教科書(ii)では単語の翻訳や反対語を書かせるなど、単語の丸暗記が必要な練習が用意されている。これに対し、教科書(iii)はそのような練習がなくなり、代わりに、聴解の練習が行われるようになった。ここに中国の日本語教育に新しい外国語教育理念が現れたと言えるであろう。

3.3.3 応用練習

「応用練習」はグループ活動である。4項目ある。練習1は絵に出ている人やものについて、既習の単語を使って話す。例えば、「これは公園の絵です、これは橋です、これは鳥です、……」。練習2はゲーム。単語を書いたカードを裏返しにする。そのカードを手に取り、「これは何ですか」と聞き、「それはりんごです」と答えが正しければ、そのカードをもらう。このように、「～は～です」を中心に、正しさのための練習のみならず、少しでもコミュニケーションなやりとりの中で文型を応用するように、場面の分かる練習が用意されているのである。

練習3「どのようにすれば、楽しい学習環境が作れるか、みんなで話そう」。練習4「アサガオの折り紙を作ろう。みんなが作ったアサガオを並べれば綺麗な絵になるよ」。この2つの練習は恐らく母語がより多く使われる活動だと想定される。この課は音声や仮名の学習段階が終り、文型を取り上げた第2課であるため、日本語を使い、学習環境について話すのには無理があろう。では、なぜ、このような言語知識の定着のためでもない、言語技能の向上のためでもない練習があるのだろうか。その狙いは何だろうか。答えは新しい日本語学習指導要領で規定された日本語のカリキュラム目標

にある。日本語のカリキュラム目標は「総合言語運用能力」だと定められている。これには「言語知識」、「言語技能」、「文化的素養」、「情意態度」、「学習ストラテジー」の五つの要素が含まれている。練習3のように、楽しい日本語の学習環境を作ろうという設定は『課程標準』^{注2}で言えば、「学習ストラテジー」や「情意態度」の範疇の中にある学習目標である。また、練習4はみんなの作品が「一枚の絵」になる。これは「情意態度」に含まれた「動機付け」や「協調精神」などの目標が具体化された学習目標であろう。

教科書(iii)の最後の練習項目は「自己測定」である。この課の単語と文型「～は～です」の文法練習によって、自らの確認が行われる。例えば、次のような一例がある。

1. 例のように文を完成してください。

例：これはかばんです。

(1)これは___です(下線に鉛筆の挿絵あり)。

2. 例のように穴埋めしてください。例：これは本です。

(1)___は李さんの自転車ですか。

上記のように、ポイントはこの課の単語と文型である。これらについては既にこの課では多くの練習が重なってきた。従って、上の問題は学習者にとって非常に簡単に完成できるものである。従来ならば、点数の差が付くように、故意に難しいテスト問題を学習者に出すのが一般的であったが、ところが、「自己測定」は違う。なによりも重要なのは学習者が自己評価する能力を養うことと、学習の結果よりも学習の過程そのものを重視することである。これは『課程標準』にある「学習者の自己評価」に関するカリキュラム理念を反映した学習目標の設定だと思われる。

4. 考察分析の結果

3つの教科書の学習項目について、考察分析した結果は以下の(1)、(2)にまとめられる。

(1)初級段階においては、日本語の正しい発音が重視されるという方針は従来と一貫している。

中等教育の教科書の場合、第1冊は中学一年の上半期で、第2冊は中学一年の下半期で使用される。「～は～です」は教科書(i)と教科書(ii)では第1冊、音声や仮名の学習段階で提出された学習項目であったが、教科書(iii)では第2冊の第2課で初めて提出されている。教科書(i)、教科書(ii)

の分析では、一見、教科書(iii)より日本語の正しい発音や言語知識を重視しているようだが、実際、教科書(iii)では音声や仮名の学習が第1冊を構成する8課全体に振り分けられていて、上半期の一学期をかけて、じっくり学習する。従って、初級段階において、日本語の正しい発音や言語知識を重視するという傾向は教科書(iii)になっても変わってはいない。ただ、教科書(i)、教科書(ii)のほうが教科書(iii)に比べて、単語の覚えこみを重要な学習目標に据えていることが分かった。

(2)3つの教科書における学習目標の設定の特徴
教科書(i)、教科書(ii)の学習目標の設定から見れば、全体は言語知識の定着のみを重視する傾向が強い。これに対し、教科書(iii)は従来の教科書になかった聴解練習、会話練習、応用練習などが盛り込まれ、「聞く・話す」技能を優先しながら、四技能統合的な向上を目指すというような学習目標の設定が特徴として見られた。

教科書(i)と教科書(ii)はオーディオリンガルの理念に基づいたものだとすれば、教科書(iii)はコミュニケーション志向が強く現れていると結論づけられよう。

5. おわりに

新教科書には目を見張るほどの変化が起きている。その変貌を起こした原因は様々あるが、まず、何と言っても、新教科書に新しい外国語教育理念が導入されたきっかけは国家基礎教育カリキュラム改革であろう。外部的な要因としては、コミュニケーション能力の養成が外国語習得の究極の目標だとする外国語教育理念の影響があったことが挙げられる。そのため、従来、軽視されていた「聞く・話す」が重要視されるようになった。内部的な要因は大学入学試験である。中国では2001年か

ら大学入試の日本語試験に従来になかった聴解問題が加えられるようになった。このように、日本語で「聞く・話す」ことは学習者にとって、現実的な需要となってきたからである。

注

1. 『全日制義務教育日語課程標準(実験稿)』(2001年)と『普通高中日語課程標準(実験)』(2003年)。新しい学習指導要領『課程標準』策定前の名称は『教学大綱』であった。
2. 『全日制義務教育日語課程標準』の略。

参考文献

- 『中学日語教学綱要』(1982) 中華人民共和国教育部
『九年制義務教育全日制初級中学日語教学大綱(試用)』
(1992) 中華人民共和国国家教育委員会
『九年義務教育全日制初級中学日語教学大綱(試用)』
(1995) 中華人民共和国国家教育委員会制訂
人民教育出版社発行『全日制義務教育日語課程標準(実験稿)』(2001)
中華人民共和国教育部制訂 北京師範大学出版社
『初級中学課本 日語(試用本) 第1冊』
人民教育出版社 1982年
『九年義務教育三年制初級中学教科書日語第1冊』
人民教育出版社 1996年
『義務教育課程標準実験教科書 日語 七年級 上』
人民教育出版社 2002年
『義務教育課程標準実験教科書 日語 七年級 下』
人民教育出版社 2002年
『日本語教育国別事情調査 中国日本事情』(2002) 国際交流基金日本語国際センター
唐磊 林洪主編(2002)『全日制義務教育日語課程標準解説(実験稿)』北京師範大学出版社

れい れいびん／北京師範大学・政策研究大学院大学 日本言語文化研究プログラム博士課程在籍
leng@kokkeng.go.jp/lenglimin@hotmail.com